

現代漢語における漢音と呉音の機能分担

陳 山 龍

0、漢字音とは

漢字音というのは、概して漢字が表わすさまざまな音的形態のうち、古く中国語音に基づいて成立したものを指す。字音とも言う。一般的に「訓」に対して「音」と呼ぶのである。また、同様に中国文明の影響を受けて、漢字や漢語を借用している北朝鮮、韓国やベトナムの中国語音を母体として出来上がった音形、それから中国本土の字音と区別するために、日本漢字音または日本字音とも呼んでいる。^①

漢字がいつ日本に伝来したのか、決して明らかなことではない。しかも、その伝来する時代的や地方的な特徴の違いによって、一字に何種類もの「音」が発生した。その主なものは、呉音・漢音・唐音の三種類である。もちろん、呉音が伝来する以前に、すでに存在している、いわゆる古字音をも入れる見方もある。

字音はいったいどんな構造をもっているのか。それを知る前に、まずその母体なる中国語の漢字の構造を見なければならない。中国語はいわゆる単音節語であっ

①中田祝夫『日本語の世界4 日本の漢字』所収、林史典「日本の漢字音」300頁（中央公論社、昭和57年6月）

て、いわば一語が一つの音節で成り立っている言語である。その音節構造を方式的に帰納すれば、

IMVF/T

というものになっている。つまり、五つの要素から成り立っているわけである。

いま「天」〔tiɛn〕を例に、その要素を簡単に説明すると、次のようである。

I=声母、音節の最初に立つ子音。〔t〕があたる。

M=介母、声母と母音との間にある、一種のわたり音。〔i〕があたる。

V=主母音、音節の核を成す母音。〔ɛ〕があたる。

F=韻尾、音節末尾の子音あるいは母音。〔n〕があたる。

T=声調、中国語のアクセント。〔〕があたる。

もちろん、上に挙げた一般式は最も複雑な音節を元に帰納されたものであるもので、あらゆる音節が必ずしも五つの要素を全部もたなければならないわけではない。最小限として〔V/T〕さえあれば十分である。

日本語の音節構造は、CVであるので、中国語のような複雑な音節を日本語の中に消化することは、そう簡単ではない。そこで、複雑な音節構造をCV構造に適応するように分解する手段を採ったわけである。単音節語である漢字が日本語に入ると、一音節になったり、二音節になったりすることになる。だから、日本語の漢語には四音節が最も多いのもこれに起因するのであろう。

漢字音についての研究は長い歴史をもっているし、しかも優れた研究や学説もたくさん見られるので、詳細はそれぞれ各専門家の著書をご参照願いたい。しかし、それらの研究は主に一字の漢字を対象に、呉音か漢音または唐音の歴史やその変遷などに重点を置いているようである。二字漢語の字音については、二字とも呉音読みか漢音読みである場合は、よく例として採り上げられている。例えば、

呉音：^{キョウモン}経文・^{モンジョ}文書・^{コンジキ}金色・^{コンジャク}今昔・^{セケン}世間・^{ショウタイ}正体・^{ジョウジュ}成就・^{セツショウ}殺生・^{トウミョウ}燈明・^{マンゴ}末期

漢音：^{ケイショ}経書・^{ブンショウ}文章・^{キンギン}金銀・^{キンコ}今古・^{チュウカン}中間・^{セイホウ}正方・^{セイコウ}成功・^{セイサツ}生殺・^{メイハク}明白・^{キカン}期間

唐音：^{フトン}蒲団・^{コタツ}火燵・^{ノレン}暖簾・^{ソロバン}算盤・^{タンボ}湯婆・^{キョウス}急須・^{イス}椅子・^{シツクイ}石炭・^{キヤツフ}脚立・^{シツペイ}竹篋

しかし、二字漢語の字音には必ずしも、呉音でなければ、すなわち漢音であるというものではない。前項が呉音読みで、後項が漢音読みである漢語もあれば、また逆の場合もある。さらに、慣用音との組み合わせになると、甚だ複雑である。たとえば、

呉音＋漢音：^{マイボツ}埋没・^{ゲンカイ}幻怪・^{ゲンカン}玄関・^{コウギョウ}興業・^{ゴウキン}合金・^{ザンギョク}殘虐・^{ジキョク}時局・^{ジュウゲツ}旬月・^{ジョウブン}条文
・^{ゾウキン}雜巾

漢音＋呉音：^{キガン}祈願・^{ケイガ}慶賀・^{コウグ}工具・^{コモン}顧問・^{シンガク}神学・^{トクギ}特技・^{ビダン}美談・^{ホウガン}砲丸・^{リョジョウ}旅情・
^{ガイコウ}外向

呉音＋慣用音：^{コウゲ}香華・^{ズガ}図画・^{ゾウケイ}造詣・^{ダンアツ}彈圧・^{ハチビン}撥餐・^{ビワ}枇杷・^{ブンバ}分派・^{マメツ}摩滅・^{メンザイ}免罪・
^{ヤクジュツ}訳述

漢音＋慣用音：^{カケイ}花茎・^{カドウ}稼働・^{コウゲキ}攻撃・^{コウケン}効験・^{サギ}詐欺・^{トクジュ}特需・^{ハンガ}版画・^{ホウガン}包含・^{ホリョ}捕虜・
^{リョクチャ}緑茶

慣用音＋呉音：^{アツカン}庄卷・^{グゼ}救世・^{ケンガク}研学・^{コウケン}纈纈・^{セモツ}施物・^{ダクオン}濁音・^{チュウゾウ}铸造・^{チュウニュウ}注入・^{ホウオウ}鳳凰
・^{ボウガイ}妨害

慣用音＋漢音：^{カケイ}佳景・^{キキ}危機・^{コウギョク}硬玉・^{ゼイカン}税関・^{チュウテツ}鑄鉄・^{バンガイ}番外・^{フンパン}噴飯・^{ユシュツ}輸出・^{リョショウ}虜囚
・^{チュウソ}注疏

というような、実に複雑な組み合わせが見られる。なぜ、こういう組み合わせができたか、という問題については、藤堂明保が次のように述べている。

呉音読みが普通である漢字と、漢音読みが普通である漢字とが結合して熟語を成した場合には、当然「呉漢混読」する熟語が生まれてくる。たとえば次の熟語の構成を考えてみよう。

家内 かナイ（ケだい）

外米 がいマイ（ゲべい）

馬肉 ばニク（メじく）

埋没 マイぼつ（ばいモチ）

注：ひらがなは漢音、カタカナは呉音。カッコはその反対の場合

これらの熟語は、一方が漢音、他方が呉音で読まれている。その理由は、

内 呉音「ナイ」が普通。漢音は参内（サンダイ）、内裏（ダイリ）の

ような場合のほか使わない。

肉 呉音「ニク」が普通。古くから和音となりきっている。漢音ジクはまず使われない。

没 漢音「ボツ」が普通。呉音モチはほとんど使われない。

というように、一字一字についての慣用の大勢がきまっている所に由来するわけである。^②

そもそも言語というものは自然に発生したものである。なぜそうなったか、理由など追及することもできないし、またそんな必要もなかろう。しかし、日本語を学習するわれわれ外国人にしては、簡単に納得が行かないのである。なぜそうなったかは追及できないにしても、どんなものにこういう現象があるのかについては、探求してもいいはずである。ということで、以下はこの問題について検討してみる。

一、漢字音の分布状態

漢字音についての研究はその歴史が長いし、業績も素晴らしいものが見られるということは前述の通りである。詳しいことは関係文献をご参照ねがうが、漢音と呉音の分布について、藤堂明保の説によれば、

- 一、古い「和音」は、依然として呉音式読み方のまま、日本語に同化した単語となった。
- 二、仏典はだいたい従来の呉音読みを保存したが、部分的に漢音読みに侵蝕された。しかし、仏典を通じて輸入された漢語は、ほぼ呉音読みのまま日本語にとりいれられた。
- 三、漢籍は次第に漢音読みに統一された。したがって、おもに儒教の書や、平

②藤堂明保『漢語と日本語』288頁（秀英出版，昭和48年4月）

安朝以後に紹介された漢籍を通じてはいった漢語は、おおむね漢音読みと
なった。^③

というような勢力分布を呈している。これはむしろ日本語全般的な傾向である。
専門家でない者には、ぼんやりとした感じを与える嫌いがある。

調査範囲を絞って、常用漢字 1945 字を対象に、その音訓を調査したのは、野
村雅昭氏である。その調査結果を見ると、次のようである。

漢音 935 (42.7%)

呉音 467 (21.4%)

漢呉音 577 (26.4%)

慣用音 192 (8.8%)

唐音 16 (0.7%)

合計 2187 (100%)

註：野村氏の調査によれば、常用漢字 1,945 に認められている音訓の総数は、
4,087 である。その内訳は、普通音 2,187 (53.5%)・普通訓 1,871 (45.8
%)・特殊音 135 (3.3%)・特殊訓 29 (0.7%) となっている。^④

上の数字はつまり普通音 2,187 を漢音・呉音などの起源によって分類した結果
である。漢呉音とは、漢音と呉音で音形が共通なものをさす。以下も同様である。
全体として、漢音が優勢であり、唐音や慣用音はわずかな割合しか占めないとい
うことがはっきりと見られる。

残念ながら、二つの研究とも漢字を対象に、調査したものであって、漢語には
言及していない。漢語における漢字音の組み合わせが、いったいどういう状態に
なっているのか、依然として不明である。だから、以下は主に漢語を対象に、そ
の字音の組み合わせの状態を調査する。

③同②268 頁

④林大監修『図説日本語』249 頁～250 頁による（角川書店、昭和57年2月）

二、調査対象及びその方法

漢語と言っても、古漢語と現代漢語などの違いがある。ここでは現代漢語を調査対象とする。範囲は『岩波国語辞典第四版』に載せているものに限る。全数調査をすべきではあるが、都合により、サンプリング調査にした。標本は二十分の一を採る。調査目的は前述した通りに、字音の組み合わせの状態を究めるのであるので、漢語の中で最も多数を占めている二字漢語を中心に調査することにした。

以上の規定に基づき、1,310の漢語をピックアップした。1,310の漢語と言っても、全部見出し語として立てられているものではない。たとえば、

かいさく〔開削・開鑿〕

かどう〔花道・華道〕

すおう〔蘇芳・蘇方・蘇枋〕

というように、二つか三つの漢語が並立されているものもある。その字音が一致していないので、それぞれ二語か三語として計算する。こういうペアは併せて55組見られる。従って、見出し語として立てられているのは、実は1,253語しかない。

なお、字音を分類する際、漢和辞典に準拠するが、しかし全ての漢和辞典の記述は必ずしも一致しないことがある。たとえば、「幡」という字音については、林大監修『現代漢語例解辞典』には、

幡 ハン㊦㊧㊨

尾崎雄二郎等編『角川大字源』には、

幡 ハン㊦㊧㊨ ホン㊦㊧㊨ マン㊦㊧㊨

というような相違が見える。どちらが正確なのか簡単には判断できないが、敢えて林大監修『現代漢語例解辞典』を分類の準拠としたことを断っておく。

三、結果の分析

『岩波国語辞典』から二十分の一の抽出比で採った標本 1,310 を、一々『現代漢語例解辞典』に当たって、その字音の組み合わせを類別に分析すると、次のようである。

呉音 + 呉音:	逸 ^{イツソク} 足 ^{グセツ} ・口 ^{ゲン} 舌 ^{グク} ・術 ^{ジュン} 学 ^{オウ} ・順 ^{ザン} 応 ^{ガイ} ・残 ^{ソウ} 骸 ^ゲ ・象 ^{ドク} 牙 ^{シユ} ・毒 ^{ドク} 手 ^{シユ}
漢音 + 漢音:	迂 ^ウ 闊 ^{カツ} ・外 ^{ガイ} 港 ^{コウ} ・救 ^{キウ} 援 ^{エン} ・経 ^{ケイ} 営 ^{エイ} ・潤 ^{ジュン} 滑 ^{カツ} ・性 ^{セイ} 格 ^{カク} ・総 ^{ソウ} 計 ^{ケイ}
呉音 + 漢音:	一 ^{イツ} 席 ^{セキ} ・減 ^{ゲン} 価 ^カ ・合 ^{ゴウ} 金 ^{キン} ・純 ^{ジュン} 潔 ^{ケツ} ・存 ^{ゾン} 外 ^{ガイ} ・毒 ^{ドク} 牙 ^ガ ・部 ^ブ 隊 ^{タイ}
漢音 + 呉音:	花 ^カ 道 ^{ドウ} ・航 ^{コウ} 空 ^{クウ} ・神 ^{シン} 学 ^{ガク} ・総 ^{ソウ} 合 ^{ゴウ} ・特 ^{トク} 技 ^ギ ・繁 ^{ハン} 榮 ^{エイ} ・文 ^{ブン} 脈 ^{ミヤク}
呉音 + 慣用音:	一 ^{イツ} 反 ^{タン} ・直 ^{ジキ} 話 ^ワ ・凶 ^ズ 画 ^ガ ・彈 ^{ダン} 圧 ^{アツ} ・八 ^{ハチ} 幡 ^{マン} ・分 ^{ブン} 派 ^パ ・訳 ^{ヤク} 注 ^{チュウ}
慣用音 + 呉音:	圧 ^{アツ} 卷 ^{カン} ・研 ^{ケン} 学 ^{ガク} ・濁 ^{ダク} 音 ^{オン} ・注 ^{チュウ} 入 ^{ニウ} ・妨 ^{ボウ} 害 ^{ガイ} ・救 ^グ 世 ^ゼ ・施 ^セ 物 ^{モツ}
漢音 + 慣用音:	花 ^カ 茎 ^{ケイ} ・厚 ^{コウ} 遇 ^{グウ} ・効 ^{コウ} 驗 ^{ケン} ・詐 ^サ 欺 ^ギ ・版 ^{ハン} 画 ^ガ ・特 ^{トク} 需 ^{ジュ} ・捕 ^ホ 虜 ^{リョ}
慣用音 + 漢音:	危 ^キ 機 ^キ ・鯨 ^{ゲイ} 飲 ^{イン} ・鯨 ^{ケン} 化 ^カ ・準 ^{ジュン} 拠 ^{キョ} ・税 ^{ゼイ} 関 ^{カン} ・濁 ^{ダク} 世 ^{セイ} ・番 ^{バン} 外 ^{ガイ}
呉漢音 + 呉漢音:	惡 ^{アツ} 貨 ^カ ・雨 ^ウ 季 ^キ ・開 ^{カイ} 始 ^シ ・吸 ^{キウ} 引 ^{イン} ・高 ^{コウ} 級 ^{キウ} ・參 ^{サン} 觀 ^{カン} ・遭 ^{ソウ} 遇 ^{グウ}
呉漢音 + 呉音:	運 ^{ウン} 動 ^{ドウ} ・原 ^{ゲン} 音 ^{オン} ・高 ^{コウ} 下 ^ゲ ・国 ^{コク} 民 ^{ミン} ・勝 ^{ショウ} 負 ^フ ・指 ^シ 導 ^{ドウ} ・損 ^{ソン} 害 ^{ガイ}
呉漢音 + 漢音:	雲 ^{ウン} 泥 ^{ディ} ・運 ^{ウン} 命 ^{メイ} ・見 ^{ケン} 解 ^{カイ} ・国 ^{コク} 文 ^{ブン} ・商 ^{ショウ} 品 ^{ヒン} ・送 ^{ソウ} 金 ^{キン} ・沢 ^{タク} 山 ^{サン}
呉音 + 呉漢音:	一 ^{イチ} 点 ^{テン} ・限 ^{ゲン} 界 ^{カイ} ・極 ^{ゴク} 秘 ^ヒ ・順 ^{ジュン} 位 ^イ ・読 ^{ドク} 者 ^{シャ} ・分 ^{ブン} 配 ^{バイ} ・分 ^{ブン} 野 ^ヤ
漢音 + 呉漢音:	解 ^{カイ} 散 ^{サン} ・機 ^キ 器 ^キ ・警 ^{ケイ} 戒 ^{カイ} ・山 ^{サン} 岳 ^{ガク} ・世 ^{セイ} 紀 ^キ ・抽 ^{チュウ} 選 ^{セン} ・範 ^{ハン} 圍 ^イ
慣用音 + 呉漢音:	圧 ^{アツ} 延 ^{エン} ・準 ^{ジュン} 急 ^{キウ} ・施 ^セ 藥 ^{ヤク} ・濁 ^{ダク} 水 ^{スイ} ・濁 ^{ダク} 点 ^{テン} ・注 ^{チュウ} 水 ^{スイ} ・麻 ^マ 藥 ^{ヤク}
呉漢音 + 慣用音:	威 ^イ 壓 ^{アツ} ・運 ^{ウン} 賃 ^{チン} ・過 ^カ 激 ^{ゲキ} ・黒 ^{コク} 板 ^{バン} ・中 ^{チュウ} 枢 ^{スウ} ・披 ^ヒ 露 ^{ロウ} ・邦 ^{ホウ} 画 ^ガ
唐音 + 呉漢音:	清 ^{シン} 規 ^ギ
呉漢音 + 唐音:	菖 ^{ショウ} 蒲 ^フ

併せて 17 種類の組み合わせが見られる。まさに複雑多岐と言えよう。これは単に漢音か呉音か唐音だけでは済まされないことが一目瞭然である。なぜこういうような組み合わせができたかについては、藤堂明保の言われる通りだと思うが、

一体どんな組み合わせが最もよく現れるか、その出現回数を統計して順序を配列してみると、次のようである。

①漢音+漢音	213 (16.3%)
②呉漢音+漢音	197 (15.0%)
③呉漢音+呉漢音	184 (14.0%)
④漢音+呉漢音	132 (10.1%)
⑤呉音+漢音	131 (10.0%)
⑥呉漢音+呉音	108 (8.2%)
⑦呉音+呉漢音	103 (7.9%)
⑧呉音+呉音	74 (5.6%)
⑨漢音+呉音	63 (4.8%)
⑩呉漢音+慣用音	20 (1.5%)
⑪慣用音+呉漢音	19 (1.5%)
⑫呉音+慣用音	18 (1.4%)
⑬慣用音+漢音	18 (1.4%)
⑭漢音+慣用音	17 (1.3%)
⑮慣用音+呉音	11 (0.8%)
⑯唐音+呉漢音	1 (0.00)
⑰呉漢音+唐音	1 (0.00)
合計	1,310 (100%)

上の数字からはっきりと見えるのは、「漢音+漢音」の組み合わせが断然トップに立つこと及び「唐音+呉漢音」と「呉漢音+唐音」の組み合わせが少ないことである。こういう結果は野村氏の「常用漢字の音訓」に示されているのと同じであって、予想通りである。そして、二番目に「呉漢音+漢音」が立つのも自然の成り行きであろう。なぜかという、野村氏の調査には「漢呉音」が「漢音」に次いで、26.4%も占めているからである。その組み合わせが多いのは当然である。

だが、〔呉漢音＋呉漢音〕と〔漢音＋呉漢音〕の配列順序が予想と逆になるのは、やや腑に落ちない。もし〔呉漢音＋漢音〕が多いという成り行きが確実ならば、〔漢音＋呉漢音〕が優勢なはずであるが、なぜ〔呉漢音＋呉漢音〕より少なく出現するのか、不明である。しかし、そうとは言っても、もし上に挙げた17種類の組み合わせを全般的によく見れば、ある傾向が存在しているのに気づかれる。たとえば、

〔呉音＋漢音〕131（10.0％）と〔漢音＋呉音〕63（4.8％）

〔慣用音＋漢音〕18（1.4％）と〔漢音＋慣用音〕17（1.3％）

を見れば、前項が「漢音」である組み合わせにはどちらも出現度数の低いことが分かる。そして更に、

〔呉漢音＋呉音〕108（8.2％）と〔呉音＋呉漢音〕103（7.9％）

〔呉漢音＋漢音〕197（15.0％）と〔漢音＋呉漢音〕132（10.1％）

〔呉漢音＋慣用音〕20（1.5％）と〔慣用音＋呉漢音〕19（1.5％）

の三組には、いずれも前項が「呉漢音」である組み合わせが優勢を見せている。こういう傾向がすべての漢字音の組み合わせに当てはまるかどうか、分らないが、少なくとも今度のサンプリング調査においては、こういう傾向が存在していることだけは否定できないであろう。

四、各字音の機能分担

上表に示されているように、純粋な「呉音」読みの漢語が少なく、わずか74語の5.6％しか占めていない。これはむしろ現代日本語の特徴の一つであると思う。現代日本語に「呉音」が少ないのは、明治期に「呉音」が「漢音」に転化したことに起因しているが、一方〔呉音＋漢語〕131（10.0％）とか〔漢音＋呉音〕63（4.8％）などの組み合わせが、相当な数量を占めているのも見逃してはいけない事実である。それでは、各字音が漢語における機能分担は一体どんな状態を

呈しているのか。上の調査資料に基づいて計算してみよう。

計算する際に、字音の出現箇所、つまり前項か後項かを別々に処理する。そうすると、その結果は次の通りである。

〔漢音+〇〇〕	425 (32.4%)	〔〇〇+漢音〕	559 (42.7%)
〔呉音+〇〇〕	326 (24.9%)	〔〇〇+呉音〕	256 (19.5%)
〔呉漢音+〇〇〕	510 (38.9%)	〔〇〇+呉漢音〕	439 (33.5%)
〔慣用音+〇〇〕	48 (3.7%)	〔〇〇+慣用音〕	55 (4.2%)
〔唐音+〇〇〕	1 (0.0%)	〔〇〇+唐音〕	1 (0.0%)
小計	1,310 (100%)	小計	1,310 (100%)

前項が「呉漢音」であるペアがドップであるのに対して、後項になると、「漢音」が優勢を見せている。その比率から見れば、それぞれ「漢音」が後項に、「呉漢音」が前項に位するのに向いているようである。だが、全般的に見れば、「漢音」がやはり優勢である。それから、「漢音」や「呉漢音」と組み合わせたペアが実に73.8%も占めているのも看過できないことである。もし、さらに「呉音」を入れれば、実に全漢語の96%も含まれているので、漢語の字音はほとんどこの三種類の音に占められていると言ってよかろう。

五、まとめ

既述のように、現代日本語における漢語字音の分布は、少なくとも一冊の辞典を対象に調査しなければならないが、都合により二十分の一の標本しか採れなかった。その結果は上に述べた通りである。結果に現れた傾向がすべての漢語に当てはまるかどうかは疑問であるが、しかし採用の標本に限っては、「漢音」が前項によりも、後項に来る傾向がやや強いのに対し、「呉漢音」がよく前項に来るのは目立っていると言えよう。

なぜ、違う字音がこういうように組み合わせたかは、追及できない問題かもし

れないが、しかし、どの時代からこういう組み合わせができたかは、究める必要があると思うので、今後の課題にする。

参考文献：

- ①国語学会編『国語学大辞典』東京堂出版昭和55年9月
- ②佐藤喜代治編『国語学研究事典』明治書院平成4年11月8版
- ③中国語学研究会編『中国語学新辞典』光生館昭和54年6月
- ④西尾実等編『岩波国語辞典』第四版岩波書店1986年10月4版
- ⑤尾崎雄二郎等編『角川大字源』角川書店1992年2月
- ⑥中田祝夫著『日本の漢字』中央公論社昭和57年6月
- ⑦野村雅昭「常用漢字の音訓」『計量国語学』第十三巻一号1981年
- ⑧佐藤喜代治『日本の漢語—その源流と変遷』角川書店昭和54年10月
- ⑨玉村文郎編『講座日本語と日本語教育6日本語の語彙・意味（上）』明治書院，
平成元年8月
- ⑩辻村敏樹編『講座日本語と日本語教育10日本語の歴史』明治書院，平成3年7
月